

村上春樹『海辺のカフカ』論

―夏目漱石『坑夫』との関係性について―

大岡 愛梨沙

〈キーワード〉死 異界 成長

一 はじめに

『海辺のカフカ』^(注1)は、村上春樹の一〇作目の長編小説である。本作以前の作品は、二〇代後半から三〇代前半の人物が主人公であったが、本作で初めて一五歳の少年が主人公となっており、村上春樹作品の中でも転機となる一作であるといえる。本論では、村上春樹『海辺のカフカ』の主人公であるカフカ少年が夏目漱石の『坑夫』を読み、その主人公に共感を示している箇所注目する。

まず、『坑夫』の主人公は炭坑という異界に入り、未知との遭遇を果たす。『海辺のカフカ』のカフカ少年は、佐伯さんの核である「森」の中へ入ることで、「迷宮」という異界へ足を

踏み入れる。この両者の構造に、共通点が見られることを明らかにする。そして、異界から出てきた時に、『坑夫』の主人公と『海辺のカフカ』の主人公であるカフカ少年の精神的な成長の次元に差異があることに注目し、その結果、カフカ少年がどのような成長を遂げていると言えるのかを明らかにする。

村上春樹と夏目漱石の関連については、尹相仁氏^(注2)、角南範子氏^(注3)、上田穂積氏^(注4)、白岩玄氏^(注5)、柴田勝二氏^(注6)が指摘しているが、中でもカフカ少年と夏目漱石『坑夫』の関連について指摘しているのは上田氏のみである。その上田氏も、『坑夫』よりも作中における「テクストの〈現在〉」を形成している「虞美人草」をどう扱うのかの方が問題^(注7)としており、『虞美人草』に注目している。その結果、「白樺派の扱いに関するハルキの展望」についての考察を重点的におこなっており、『坑夫』の作品そのものとの比較は行っていない。

そこで、本論では、『海辺のカフカ』と『坑夫』の二作品に注目し、『海辺のカフカ』の作中に『坑夫』が登場することがどのような意味を持つのかについて考察し、『坑夫』の主人公とカフカ少年の道行きを比較し、カフカ少年が受けた影響について明らかにしたい。

二 カフカ少年と夏目漱石『坑夫』の関係性について

本節では、『海辺のカフカ』内に登場する漱石作品に込められた意味について考察する。カフカ少年は、香川にいる間、甲村記念図書館で夏目漱石の全集を読んでいる。「全作品を読破しようと思うくらい漱石の気に入っているわけだ」(第13章一八〇頁)と大島さんに問われると頷いていることから、漱石作品に非常に思い入れを持っていることが分かる。また、カフカ少年は甲村記念図書館に来てから読んだ作品について問われると、「今は『虞美人草』、その前は『坑夫』です」(第13章一八〇頁)と返答しているため、『虞美人草』と『坑夫』の名前が作中で挙げられていることが確認できる。

その後、カフカ少年は『坑夫』の感想を大島さんに語るが、

その際に比較対象として挙げられるのは夏目漱石『三四郎』の主人公である。カフカ少年と大島さんは次のような会話をする。

「君が言いたいのは、『坑夫』という小説は『三四郎』みたいな、いわゆる近代教養小説とは成り立ちがずいぶんちがっているということかな？」

僕はうなずく。「うん、むずかしいことはよくわからないけど、そういうことかもしれない。三四郎は物語の中で成長していく。壁にぶつかり、それについて真面目に考え、なんとか乗り越えようとする。そうですね。でも『坑夫』の主人公はぜんぜんちがう。彼は目の前にでてくるもの。ただだからと眺め、そのまま受け入れているだけです。

(後略) (傍線は筆者による、以下同) (第13章一八二頁)

カフカ少年は香川に来る前に既に『三四郎』を読んでいるため、『坑夫』の比較対象として『三四郎』の内容の説明が出来るのだと考えられる。このことから、カフカ少年が甲村記念図書館に来てから読んでいる『坑夫』と『虞美人草』、そして香川に来る前に既に読了しており、『坑夫』の比較対象として名前が挙げられる『三四郎』の三作品は、本作において重要な意味が込められているのではないかと推測される。

『三四郎』について、玉井敬之氏は次のように指摘している。^(注7)

小川三四郎のおかれた状況からみて、また漱石の意図からみて、『三四郎』の小説作法は、作中の人物を掌中にして性格を専制的に規定し、因果関係で縛り付けた『虞美人草』とは異なるはずである。『虞美人草』の執筆中におこった「性格」というものについての反省は、『坑夫』となつてあらわれている。『坑夫』の主人公は、「本当の事を云ふと性格なんて纏まつたものはありやしない」「本当の人間は妙に纏めにくいものだ。神さまでも手占ずる位纏まらない物体だ」と考え、「自分のばらばらな魂がふらふら不規則に活動する現状」を記述することによって『虞美人草』の反省と、同時に「性格」への模索をおこなつたのである。ここで、『三四郎』は「性格への模索」が行われた作品であると指摘されている。また、その「性格」というものについての反省は、『虞美人草』の執筆中に発生し、『坑夫』で再検討がなされているため、カフカ少年が『虞美人草』・『坑夫』・『三四郎』を意識を向けることは、カフカ少年の抱える問題が、この三作に描かれているテーマと共通するためであると考えられる。次に、カフカ少年が『虞美人草』の続きを読み始め、読了する場面を示す。

閲覧室に戻って『虞美人草』の続きを読む。僕はもともと

と速く読む読書家ではない。時間をかけて一行一行を追うタイプだ。文章を楽しむ。文章が楽しめなければ、途中で読むのをやめてしまう。5時少し前にその小説を最後まで読み終え、書架に戻し、それからソファに座つて目を閉じ、昨夜のことをほんやりと考える。(第13章一八六頁)

カフカ少年は読書について、「文章が楽しめなければ、途中で読むのをやめてしまう」と述べているが、『虞美人草』は「最後まで読み終え」ることが出来ている。このことから、カフカ少年にとつて『虞美人草』とは、『坑夫』のように大島さんと議論をおこなう程重要な作品ではないが、最後まで読もうと思える程度には心が惹きつけられる部分があったのだと考えられる。

『虞美人草』について、遠藤祐氏は「漱石がはじめて死を一遍のモチーフとして取り上げた」作品であると指摘されている(注)。しかし、この「死」というモチーフは、『虞美人草』に留まらず、それ以降の作品である『坑夫』や『三四郎』にも引き継がれていく。そのため、カフカ少年は『坑夫』に最も興味を示しているが、『三四郎』に顕著な「性格」の問題と、『虞美人草』に顕著な「死」の問題を、三作品に共通するものとして感じ取り、自身の成長にあたって必要な要素として注目してい

ると考えられる。

以上のことから、カフカ少年は三作品に惹かれたが、最も興味を示した作品は『坑夫』であると考える。ならばカフカ少年が『坑夫』をどう読んだのか。以下分析する。

『坑夫』を読み終えたカフカ少年は、『坑夫』の主人公のことを「世間知らずの坊ちゃん」と述べ、炭坑を「社会のいちばん底みたいところ」(第13章一八一頁)と表現している。そして、『坑夫』の主人公の炭坑での経験を、「生きるか死ぬかの体験」であると述べ、『坑夫』の主人公が重要な体験をしたことに注目している。その結果、『坑夫』の主人公に成長が見られないことを受けて、カフカ少年は「なにを言いたいのかわからない」という部分が不思議に心に残る(第13章一八二頁)と発言しており、『坑夫』の主人公の体験に対して強く関心を示している。また、カフカ少年は『坑夫』の主人公が「穴に入ったときとほとんど変わらない状態で外に出て」くること、「自分で判断したとか選択し」ていないこと、「受け身」であることを指摘している。しかし、カフカ少年は『坑夫』の主人公を否定するのではなく、「人間というのはじっさいには、そんなに簡単に自分の力でものごとを選択したりできないものなんじゃないかな」(第13章一八二頁)という感想を述べており、『坑夫』の

主人公のあり方に肯定的であるといえる。そのようなカフカ少年に対して、大島さんは、「それで君は自分をある程度その『坑夫』の主人公にかさねているわけかな？」(第13章一八二頁)と、カフカ少年が自身と『坑夫』の主人公を重ねている可能性を指摘する。カフカ少年は大島さんの問いに対して首を振って否定する。

そのようなカフカ少年の反応に対して、大島さんは「でも人間はなにかに自分を附着させて生きていくものだ」(第13章一八三頁)と返答する。この発言から大島さんは、カフカ少年が『坑夫』の主人公とカフカ少年自身を「附着」させていることを指摘していると推測される。このことから、カフカ少年は無自覚に『坑夫』の主人公に共感を抱き、自身と重ね合わせていると考えられる。また、『坑夫』の感想を言い終わったカフカ少年に対して大島さんは「現実の家出少年の意見として聞けば一段と説得力がある」(第13章一八三頁)と述べていることから、家出をして炭坑に向かった『坑夫』の主人公と、家出をして香川に来たカフカ少年に共通点を見出していると考えられる。

カフカ少年は『坑夫』の主人公に強く惹かれ、自身と重ね合わせていることが窺える。そのことと関わる話題として、大島

さんはシューベルトを好む理由を語る。その箇所を示す。

「曲そのものが不完全なのに、どうして様々な名ピアノストがこの曲に挑むんですか？」

「良い質問だ」と大島さんは言う。そして問を置く。音楽がその沈黙を満たす。「僕にも詳しい説明はできない。でもひとつだけ言えることがある。それはある種の不完全さを持った作品は、不完全であるが故に人間の心を強く引きつける——少なくともある種の人間の心を強く引きつける、ということだ。たとえば君は漱石の『坑夫』に引きつけられる。『こころ』や『三四郎』のような完成された作品にない吸引力がそこにはあるからだ。君はその作品を見つめる。べつの言いかたをすれば、その作品は君を見つめる。シューベルトの二長調のソナタもそれと同じなんだ。そこにはその作品にしかできない心の糸の引つ張りかたがある」

(第13章一九〇頁・一九一頁)

大島さんは、「ある種の不完全さを持った作品は、不完全であるが故に人間の心を強く引きつける」のだと説明し、『坑夫』には、「『こころ』や『三四郎』のような完成された作品にない吸引力」があることで、カフカ少年と『坑夫』という作品がお互いに惹かれあつていくと語る。このことから、『坑夫』の主

人公のあり方には不完全さがあり、その不完全さのかたちが、カフカ少年の現状と類似していることで、その他の漱石作品以上にカフカ少年が重要視するのだと考えられる。大島さんは、続けて「シューベルトというのは、僕に言わせれば、ものごとのありかたに挑んで破れるための音楽なんだ」(第13章一九三頁)と述べる。シューベルトの音楽が不完全であるが故に大島さんの心が惹きつけられるとした時に、ここで言われる「ものごとのありかたに挑んで破れる」という要素はシューベルトの音楽に限らず、不完全な作品として登場する『坑夫』にも共通するといえる。『坑夫』の主人公は、社会から逃げるために坑夫になろうとするが、そこで坑夫にもなれない。そのため、カフカ少年は、『坑夫』の主人公の不完全さに惹かれた結果、坑夫になりきれなかったその主人公の価値観に共感しつつも、『坑夫』の主人公と同じ道筋をたどりながら、『坑夫』が達成できなかったことに挑戦しようという感情が働いていると推察される。

佐々木充氏は、『坑夫』の主人公が炭坑へ入ることについて、「死を心の何処かに思いつつ、ほとんど無意識に歩いている青年が語るものは」「彼自身の無意識関への旅程」(注⁹)なのだと言っている。また、佐藤泰正氏は、『坑夫』を「ひとりの青

年の自己回復」の物語であり、漱石が「アイデンティティを求めてあえぎ、苦悩した幼い青春の彷徨の日々の内面」(注10)を描く作品だと述べている。そして、この青年に関する指摘として石嶋淳子氏が、『坑夫』は「世界のどこに位置を占めるべきかわからない青年特有の迷いを象徴して」(注11)おり、それは『虞美人草』・『三四郎』にも共通すると指摘している。このことから、カフカ少年と『坑夫』の主人公が持っている迷いは、人として変化が起こる時期に生じる自己形成に関する迷いであるという共通点があるといえる。カフカ少年は自分の不完全さを認識し、「世界でいちばんタフな15歳の少年」に成長したいと願う。そして『坑夫』に惹かれた結果、『坑夫』の主人公が炭坑という異界に入ったように、自身の持つ迷いを解決するために「森の中」という異界に足を踏み入れることとなったのだと考えられる。

以上のことから、作中で『虞美人草』・『坑夫』・『三四郎』の題名が挙げられるのは、この三作品には青春期を生きる人物が登場するからだと考えられるのである。この三作品の主人公は、人として変化が起こる時期を過ごしている。カフカ少年も現在の自身に迷いがあり、「世界でいちばんタフな15歳の少年」へと成長していこうと試みているため、カフカ少年はこの三作品

に登場する青年像と自己を重ねているといえる。また、三作品とも死というテーマを意識していることが共通している。しかし、カフカ少年は自己の成長とそのために必要な体験が『坑夫』の主人公の異界体験と一致すると考えたことで、『坑夫』に最も共感を示したと分析した。

三 『坑夫』の主人公とカフカ少年の異界体験について

前節で、カフカ少年が『坑夫』(注12)に強く惹かれたことを明らかにした。その後、カフカ少年は「森」という異界に足を踏み入れ、そこから出てくることになる。これは、『坑夫』の主人公が炭坑という異界に入り、そこから抜け出すという構造と一致していると考えたため、本節では、両者の異界体験の構造に注目し、どのような差異があるのかについて分析する。

まず、異界に入る動機について考察する。『坑夫』の主人公は炭坑に向かう際の心理を次のように述べている。

自分は今が今迄死ぬ気でゐた。死な、い迄も人間の居ない所へ行く気でゐた。それが出来損つたから、生きる為に働く気になつた迄である。

(二三頁)

主人公は他者と摩擦が発生した結果、社会を拒絶し「死ぬ気でゐた」が、死ぬことを目標としていたにもかかわらず、ポン引きに声をかけられたことで死ぬことすら「出来損つたから、生きる為に働く気になつた」と述べており、坑夫となることに積極性はないことが分かる。そのため、炭坑という異界へ足を踏み入れるのも、そこに自身の意志は働いていないと推察される。

『坑夫』の主人公に対し、カフカ少年は「森」に入る前に大島さんから、「僕らの住んでいる世界には、いつもとなり合わせに別の世界」（第37章二一八頁）が存在し、それは「迷宮」であると知らされる。そして、その「迷宮」は生き物の腸のあたりが原型であり、人間の内部に「迷宮」が存在することを知られる。カフカ少年は、大島さんから「迷宮」の話聞いた後に、自分の意思で「森」に入ろうとする。その箇所を示す。

僕はまた森の中に入る。（中略）ここまでが安全地帯だ。ここからなら問題なくキャビンに戻ることはできる。初心者向きの迷宮、テレビ・ゲームでいえば「レベル1」、簡単にクリアできる。しかしここから先に進もうとすれば、僕はより深くより挑戦的な迷宮に足を踏み入れることになる。（第39章二四四頁）

カフカ少年は、「森」を「迷宮」と言い換えている。大島さんの「迷宮」の説明をふまえた時に、カフカ少年がこの場面の後に「森」へと足を踏み入れる行為は、人間の深層部である「迷宮」に入ることだと考えられる。また大島さんは「君の外にあるものは、君の内にあるものの投影であり、君の内にあるものは、君の外にあるものの投影だ。だからしばしば君は、君の外にある迷宮に足を踏み入れることによって、君自身の内にセツトされた迷宮に足を踏み入れることになる」（第37章二一九頁）と述べている。このことから、カフカ少年が森の中に入る行為には、自己の深層部に入つて、そこにいる他者と出会い、他者の深層部に入ることによって自己理解をし、自身の抱える問題に対する答えを解決するという意味があると推測される。そのため、カフカ少年が森のさらに奥に進もうとした時に、「ここから先に進もうとすれば、僕はより深くより挑戦的な迷宮に足を踏み入れることになる」と述べるのは「森」の奥に入ることで「迷宮」へと足を踏み入れ、自身の抱える問題に対峙することになることを理解していたからだと考えられる。しかし、カフカ少年はそのことを理解した上で「森」の奥へと進んでいったため、自身で選択を行つて異界へと旅立っているといえるだろう。カフカ少年は、『坑夫』の主人公と同じように異界に入るが、『坑

夫』の主人公は炭坑に入ることに意志や積極性が見られなかった。『坑夫』の主人公に対して、カフカ少年は、『坑夫』を読んで自身と主人公を重ねることで、異界で待つている問題に立ち向かうことが自分にとって必要な試練だという意識を持つて異界に入っていく。そのため、カフカ少年は『坑夫』を自身の成長の手引きとしながら、積極的に問題に挑戦しようとしているため、両者の異界に入る動機は全く違うといえる¹と考察した。

次に、両者が異界に入った後にそこで出会うものについての考察をおこなう。『坑夫』の主人公が八番坑という最も深い穴に入った場面を示す。

意識を数字であらはすと、平生十のものが、今は五になつて留まつてゐた。それがしばらくすると四になる。三になる。推して行けばいつか一度は零にならなければならぬ。自分は此の経過に連れて淡くなりつ、変化する嬉しさを自覚してゐた。此の経過に連れて淡く変化する自覚の度に於て自覚してゐた。嬉しきは何処迄行つても嬉しさに違ない。だから理屈から云ふと、意識がどこ迄降つて行かうとも、自分は嬉しいとのみ思つて、満足するより外に道はない筈である。所が段々と競り卸して来て、愈零に近くなつた時、突然として暗中から躍り出した。こいつは死ぬぞ

と云ふ考へが躍り出した。すぐに続いて、死んぢや大変だと云ふ考へが躍り出した。自分は同時に、豁と眼を開いた。

(二二七頁)

主人公は、意識がどんどん遠のいていく変化に「嬉しき」を見出しているが、元々死んでも構わないという発想で炭坑にやって来たため、意識が遠のいていくことで、現実社会に残したままにしている問題について思い煩う必要がなくなるといふことに喜びを見出しているのだと推測される。しかし、自身の意識が「愈零に近くなつた時、突然として暗中から躍り出した」と述べている。自身の意識がほとんど消えかかった状態の時に突然出てきたものは、「こいつは死ぬぞと云ふ考へ」、そして「死んぢや大変だと云ふ考へ」だった。主人公は、意識が薄らいでいくことによつて現実社会から離れていくことに安らぎを感じていたが、意識が消えかかった時に無意識の自分と出会つたのだと考えられる。そして、無意識の世界での自分は、意識が薄らいでいくことに対して、肉体が死を感じ取り、死に対しての危機感から拒絶をおこなつたのだと考えられる。そのため、『坑夫』の主人公は、炭坑という異界の中のさらに八番坑という最も深い異界の中で、死と出会つたのだと推測される。そして、死と向き合つた時に、今まで考えていた「死のう」といふ意識

以上に死に対して無意識の危機感を持ったと考えられる。その結果、死を拒絶したのだと考察される。

カフカ少年は森に入ろうとするが、一度引き返す。カフカ少年は、カラスが鋭く鳴く声自分が宛てた警告音だと感じる。その警告音によって森に入る事をためらったカフカ少年の逃げ場は「円形の広場」であり、その場所は「ひそやかな安全地帯」(第39章二四六頁)と言い換えがされる。このことから、「円」とは、外界が遮断され、自身の身が守られる安全な空間を意味していると推測される。カフカ少年は、ついに「森」の最も奥まった中核にたどり着く。そして、そこで15歳の佐伯さんと出会い、二人だけの静寂な空間に留まろうとする。カフカ少年は、森の奥深くで佐伯さんと二人だけで存在し続けている状態を「閉じた円の中にいる」(第45章三五〇頁)と表現している。これは、カフカ少年にとって、自身が求める存在である佐伯さん以外の全てを遮断しきった状態が「安全地帯」ともいえる理想の空間であることを表していると考えられる。しかし、カフカ少年は、「森」の中で佐伯さんと居続けられる喜びを得るかわりに、時間や自分の名前などが意味を持たないものになっていることに気がつく。これは、「森」の奥が、現実社会と切り離された空間であるからだとして推測される。『坑夫』の主人公が炭坑の奥ま

で入ることで、死と向き合ったとき、無意識の自己からの働きかけがあった。そのため、『坑夫』の主人公は無意識の世界に入っていたとき、そこで死の危機感を持った。しかし、カフカ少年の場合は、現実世界から切り離された「森」という「迷宮」に入り、自己形成を試みた結果、そこには自身が最も強く求める佐伯さんが待っていた。

このことから、カフカ少年の場合は、自分の無意識の世界に入っていたにもかかわらず、カフカ少年自身が抱える問題が他者とかかわっていくことだったため、『坑夫』の主人公のように、死と直接対面するのではなく、死の世界の住人である佐伯さんと対面することになったのだと考えられる。両者とも、自己形成にあたって、死との接触がある。しかし、『坑夫』の主人公の場合は死と向かい合った時に危機感を持つのに対して、カフカ少年は、死の世界でその住人である佐伯さんと生き続けることで命が落ち着いた状態になるため、死の世界に永遠に留まることを選ぶようにすることに差がある。カフカ少年はただ死と向き合うだけではなく、死の世界を、自身の求める他者と補完しあうという理想の環境として受け入れようとしていくと考えられる。

しかし、『坑夫』の主人公もカフカ少年も、最終的にはその

異界から出ることとなる。そのため、両者の異界から出るきっかけの考察をおこなう。『坑夫』の主人公は、八番坑で死と向き合った瞬間について振り返ったとき、「大切の手前迄行つて、急に反対の方角に飛び出してくる。消極へ向いて進んだものが、突如として、逆さまに、積極の頭へ戻る。すると、命が忽ち確実になる」(二二頁) 体験をしたと述べる。

このことから、主人公は炭坑へ来る前までは意思が死へと向かっていったが、いざ死が目の前まで迫ると魂が生に対して積極性を持ち、意志が生きる方向に向いたと考えられる。そのため、『坑夫』の主人公は、死ぬことを目的として炭坑に入ったが、本当に死ぬことが出来ず、目的の達成が中断されたため、炭坑を出ることとなったと考察される。

カフカ少年は「森」の奥でしばらく過ごした後、佐伯さんからもこの世界に戻るよう言い聞かされる。「森」を出るよう促す佐伯さんに対して、カフカ少年は「僕が戻る世界なんてどこにもないんです。僕は生まれてこのかた、誰かにほんとうに愛されたり求められたりした覚えがありません」(第47章三七八頁)と返答している。このことから、カフカ少年は、現実世界に戻っても自分を必要としてくれる他者がいないのだから、それは自分の居場所ではなく、自分の居場所がないのであ

ればそれは自分が存在していないことと同じであると考えていると推測される。そして、佐伯さんのいる空間であれば、自分が必要とされるため居場所があり、存在していることに意味が見いだせると考えて、佐伯さんの元に留まろうとしていると察せられる。しかし、佐伯さんはカフカ少年に、現実世界に「戻らなくちゃいけない」のだと伝える。佐伯さんはカフカ少年に「森」から出ることを求め、そして、「森」から出た先で、「あなたに私のことを覚えていてほしい」(第47章三七九頁)のだという要求をする。誰かに求められた経験の無いカフカ少年にとって、補充を願うほどに強く求めている佐伯さんからの要求はとても重要であるだろう。そのため、カフカ少年は、自身が「森」に留まる以上に、佐伯さんの要求を叶えることが重要であると考えたのだといえる。

また、佐伯さんの願いは、結果的にカフカ少年を生へと導くことだった。カフカ少年が佐伯さんのことを忘れずに記憶し続けることで、佐伯さんはカフカ少年の中で生き続けることができる。それと同時に、カフカ少年は自身に目を向けてくれた佐伯さんを心に留めておくことで、現実世界で生きていく意味を見出すことが出来る。このような思考のプロセスを経て、カフカ少年は森を出る決意を固めたのだと考察される。『坑夫』の

主人公は、死の危機から逃げるために炭坑から出ようとするが、カフカ少年は他者を求めた結果、他者の願いを尊重するために「森」から出た。そのため、異界に入るときと同様に、『坑夫』の主人公は積極的な選択ではないのに対し、カフカ少年は自分の意思で決断を下し、積極的な意思を持って異界から出てきたといえるところを考察した。

次に、異界から出た後の両者の結末に注目したい。『坑夫』の主人公は、「死んでもいい、生きてもいい、」から、「此処にあるのが、一番骨が折れなくて、一番便利」（二六五頁）だと考えて炭坑に残ろうとしている。しかし、気管支炎によって坑夫になれないことが分かる。その箇所を示す。

自分も早速墮落の稽古を始めた。南京米も食った。南京虫にも食はれた。（中略）自分は四円の月給のうちで、菓子を買つては子供にやつた。然し其の後東京へ帰らうと思つてからは、断然已めにした。自分は此の帳附を五箇月間無事に勤めた。さうして東京へ帰つた。――自分が坑夫に就ての経験は是れ丈である。（二六九頁）

主人公は、炭坑に残ることを「墮落」という単語で表現している。このことから、自分で決断したというよりは、坑夫になれないが、だからといって社会に戻りたくないという気持ち

から仕方なく炭坑に留まったのだと考えられる。

カフカ少年は「森」から出た後に「東京に戻ろうと思います」（第49章四二二頁）と発言する。続けて、東京に戻ったら学校に行き、家出をしている間に殺された父親の手続きをするために警察署に行くと話しているため、現実世界ですべきことに目が向いた結果帰ることを決意したのだと考えられる。『坑夫』の主人公は、死ぬことも出来なかつたが、現実世界に戻つて生きることも選ばなかつたのに対し、カフカ少年は佐伯さんとの関わりの中で、生きることを選択した結果、自分の意思で帰ることを選択できたといえる。

これらのことを踏まえて、最後に、両者の異界に入ったことの意味について考察する。「森」から出たカフカ少年が、大島さんの兄からサーフィンの話をされる場面を示す。

彼は言う、「ハワイにトイレット・ポウルと呼ばれるスポットがある。そこでは引き波と寄せ波がぶつかって大きな渦ができているんだ。便器の水の渦みたいになるぐるとまわっている。だから、ワイブアウトしていったん底に引きこまれると、なかなか浮きあがってこれない。波の具合合しだいでは、ひよつとしたらそのまま二度と浮かびあがれないかもしれない。でもとにかく君は海の底で、波にも

四 おわりに

まればがらじつとしていなくちゃならないんだ。あわててじたばたしたところでなんともならない。かえって体力を消耗するだけだ。実際にそういう目にあつてみると、こんなにおっかないことはちょっとほかにないね。でもそういう恐怖をいったん乗りこえないことには、一人前のサーファーにはなれない。死と二人きりで向かいあつて、知りあつて、それを乗りこえていくんだ。その渦の底で君はいろんなことを考える。ある意味では死と友だちになり、腹をわつて話をすることになる」(第49章四一四頁・四一五頁)

大島さんの兄は、サーフィンをするにあつて、「死と二人きりで向かいあつて、知りあつて、それを乗りこえていく」と、「ある意味では死と友だちになり、腹をわつて話をすること」が重要だと語る。これは『坑夫』の主人公とカフカ少年の異界体験を象徴していると考えられる。両者は、死が近づくほど苦しい困難に立ち向かい、「死と向かいあつて、乗り越えた」といえる。しかし、『坑夫』の主人公は死と向かい合った経験が自身の成長に活かせなかった。カフカ少年は、死と向かい合った結果、乗り越えることができたため、大島さんによつて「成長した」と評価されたのだと考察した。

以上のことから、カフカ少年と『坑夫』の主人公の精神的な差異についてまとめる。『坑夫』の主人公は、死への意識が強く働いた結果、自身の意思が無い状態で坑夫になる。そして「炭坑」という異界に入つていく。しかし、最も奥の「八番坑」へ入つて死と向き合った時に、死ぬ事への危機感を持つ。『坑夫』の主人公は、死ぬことも決断できないが、炭坑から出て社会で生きる決断も出来なかったといえる。カフカ少年は佐伯さんを求めた結果、「森」という異界に足を踏み入れる。しかし、佐伯さんから、「森」を出て外の世界で生きることを求められる。カフカ少年は、自己を形成するために他者を求めた。しかし、自身が最も強く求めた他者である佐伯さんの要求を聞き入れることが佐伯さんを救い、佐伯さんを救うことで自分が生きる意味が出来ると考えたのだといえる。そのため、カフカ少年は自分の意思で「森」から出るという選択をした。

カフカ少年は、『坑夫』の主人公に共感を示し、自身が成長する方法の手引きとして『坑夫』の主人公の異界体験を実践した。『坑夫』の主人公は自身の意思で何も選ばずに炭坑に入り、そこで死と向き合うという貴重な体験をしたが、その経験が自

身の生に活かされなかつたため、成長が見られなかつた。カフカ少年は自分の意思で異界に入り、自分の意思で選択して異界から出たため、自分の判断が持てなかつた『坑夫』の主人公に比べて、自分で判断して選択することが出来たという成長が見られる。また、カフカ少年は自身の求める他者である佐伯さんの意思を尊重し、佐伯さんを自身の記憶の中で生き続けさせることで、カフカ少年自身の生きる理由になるという発見をした上で異界から出たため、『坑夫』の主人公が得られなかつた成長を果たしたという結論に至った。

注1 二〇〇二年九月一二日に新潮社より上下二冊分で刊行される。本論のテキストは『海辺のカフカ(上)』(新潮社 二〇〇二年九月)、『海辺のカフカ(下)』(新潮社 二〇〇二年九月)より引用する。

- 2 尹相仁「日本近代文学における〈桃源郷〉モチーフ―夏目漱石と村上春樹の場合―」『Ideal Places in History: East and West』第10号(一九九七年三月)
- 3 角南範子「迷羊の恋人」『緑岡詞林』第二五号(二〇〇一年三月)
- 4 上田穂積「田村カフカはなぜ「坑夫」を読むのか―漱

石・直哉そしてハルキ」『徳島文理大学研究紀要』第七九号(二〇一〇年三月)

5 白岩玄「夏目漱石と村上春樹」『文學界』二〇一〇年一二月号

6 柴田勝二「村上春樹と夏目漱石―二人の国民作家が描いた〈日本〉」(祥伝社 二〇一一年)

7 玉井敬之「三四郎の感受性―『三四郎』論―」『漱石作品論集成 第五卷 三四郎』(桜楓社 一九九一年)

8 遠藤祐「漱石の反自然主義をめぐって―『虞美人草』の周辺―」『漱石作品論集成 第三卷 虞美人草・野分・坑夫』(桜楓社 一九九一年)

9 佐々木充「漱石『坑夫』試論―坑道と梯子―」『漱石作品論集成 第三卷 虞美人草・野分・坑夫』(桜楓社 一九九一年)

10 佐藤泰正「『坑夫』の試み―三好行雄 他編『講座 夏目漱石 第二卷(漱石の作品上)』(有斐閣 一九八一年)

11 石嶋淳子「『坑夫』論」『漱石作品論集成 第三卷 虞美人草・野分・坑夫』(桜楓社 一九九一年)

12 『坑夫』は明治四一年の元日から、東京の『朝日新聞』に九一回にわたって、大阪の『朝日新聞』に九六回にわたっ

て掲載された。本論のテキストは『漱石全集』第五卷（岩波書店 一九九四年）より引用する。

本稿の内容は、平成三〇年五月二六日・二七日に台湾にて行われた第七回村上春樹国際シンポジウム及び、六月一七日に本学にて行われたノートルダム清心女子大学日本語日本文学会での口頭発表に基づきます。発表に際し御教示を賜りました皆様に、厚く御礼申し上げます。

（おおおか ありさ／本学大学院博士前期課程）